第二回リレー小説「梅雨」赤組四番手

　　　　　　　　　　　　　　　ゴスロリ研究所

　医者が私に告げる。あなたは泡になって消える。そんなこといわれても実感がわかなかった。何百年も前の時代の、あるいは何万キロも離れた国の、とにかく遠い世界の現実を語られたような感じだった。私の世界には時間なんてものも、空間なんてものもなかったけれど、確かに遠かった。０次元の世界で、私というただ一点の世界で、遠さを感じた。ただ、精一杯自分の最期を思い浮かべたとき、隣には彼がいた。

次の日、気づけば私は彼のところに向かっていた。向かっていたのだが、いざ彼の家の前に来ると怖気づいてしまう。立ち止まっては周りをうろうろしたり、ちょっと離れてまた戻ってきたり、不審者だと思われてもしかたなかったと思う。結局、インターホンを鳴らす勇気が出たのは日が沈みきってからだった。

　　　　　　　　＊

　先輩がいった。

「隠れてろ」

勘の鋭い先輩のことだから、雫のつゆ風邪を聞いて、僕たちの荷物を見て、大体の状況は察していたのだろう。先輩の家の前には雫の母親がいた。面識はないが、雫の反応からするに、きっとそうだ。先輩から雫の表情は見えないが、同じ予想だろう。先輩と向き合う彼女の口から雫の名前が出て僕と先輩の予想は確信に変わる。先輩に対する雫の母親の視線は敵意にあふれている。なかなかのとばっちりである。先輩が外からドアを閉めた。逃げろという合図だ。

「裏口から出よう」

僕がいうと雫の目は先輩への申し訳なさでいっぱいになっていた。

「先輩なら大丈夫。迷惑をかけられるのが好きな人だから」

　携帯は置いていくことにした。おそらくここが割れたのも、僕の家が割れたのも携帯のＧＰＳだろう。そう考えると、そもそも僕の家を出るときに置いてくるべきだったのだが、とにかくもはや携帯を持ち歩くのは危険だった。それ以外の貴重品と、先輩からもらった二枚の絵をもって僕は雫を連れ、先輩の家を後にした。表に止めてある車は使えない。ここから先は歩きになる。

　　　　　　　　　　　＊

彼の家に上がりこんだ次の日、雨が降った。今までも好きというわけではなかったけど、この日の雨は特に嫌だった。雨が嫌いになったのかもしれない。同族嫌悪というやつだ。

　　　　　　　　　　　＊

「これからどこにいく？」

　僕が尋ねる。雫を連れて出たはいいものの、どこに向かえばいいのかわからない。なぜ信州なのか、信州のどこなのか、僕は何も知らない。聞いても雫は答えないだろう。なんとなくそんな気がする。

「んー。北」

　　　　　　　　　　　＊

さらにその二日後、幸い雨は上がった。映画を二人で見た後、せっかくだからピクニックにいった。何がせっかくなのだろう。一つでも多くの思い出がほしかったからだと、本当は気づいていた。高原で石を思いっきり蹴飛ばしたら、思いのほか遠くまで飛んで、石が存在した跡だけが残った。

「雨が降れば、いずれこの石の跡もなくなっちゃうんだね」

　私の場合はどうだろう。生きた証なんて大げさなことはいわないけれど、この石みたいに、やがて私の跡まで消えてしまうと考えると、寂しい。

「いつまでも跡が残るよりは消えてしまった方がいいこともあるよ」

　そんなものだろうか。彼の記憶の深いところに、消えることのない傷跡をつけられたならと思うのは、私のエゴだろうか。

「ふおー」

　悲しくて叫んだ。

　この日の夜、私は彼につゆ風邪を打ち明けることになる。

　　　　　　　　　　　＊

降りしきる雨のなかをしばらく歩いてふと気づいた。傘を忘れてしまった。自分のばかさ加減に呆れる。コンビニなんて気の利いたものはない。とにかく足を取られないようにひたすら歩き続けるしかない。

　　　　　　＊

　彼が熱を出した。ばかなやつだ。いや、ばかは風邪をひかないか。おかゆを食べて寝ている彼をじっと睨む。断じて見つめているのではない。睨んでいるのだ。私が消えてしまう夢をみて、私の名前を叫びながら飛び起きてくれてもいいものだが、そんな気配は微塵もない。睨み疲れて私も眠くなってきた。それから先は記憶がない。

　　　　　　＊

　雫が熱を出した。

「うみゃー」

ついに頭がおかしくなってしまったのかと思ったが、そういえば雫はいつもこんな感じだった。とはいえ、今は止んでいるが、昨日から雨の中をずっと歩いてきた。　　　体力がもう限界な上に、身体も冷え切っている。幸い、歩き続けた結果少し開けたところに出た。これなら休める場所も見つかるだろう。

「もう少しだから、頑張ろう」

「うみゃー」

　今度は叫び声に近かった。怒る元気はまだあるようだ。

　　　　　　＊

　彼の家にいるのが母親にばれた。彼の家の前をうろうろする不審者の目撃情報が入ったのか。迂闊だった。二人で彼の家を後にした。旅をすることになる。行き先は信州がいい。なんとなく、私の最期にふさわしい場所が見つかる気がする。

　　　　　　＊

　運よくホテルが見つかった。熱のある雫を寝かせ、僕はこれからのことを考える。でも考えるまでもなかった。雫はきっと、自分の死に場所を探してる。なら僕はそれに付き合うだけだ。僕も寝よう。

　　　　　　＊

　彼の先輩が信州にいるらしい。高校時代の先輩らしいが、私は会ったことがない。いきなり転がり込んで迷惑だったに違いないのに、先輩はあっさりと私たちを泊めてくれた。

　その先輩が絵を描いてくれた。彼の描いてある絵は、私が向こうにもっていく。そうすればいつでも思い出せる。私の描いてある絵は彼に持っていてほしい。そうすればいつでも思い出せる。消えた私を思い出すたびに、彼は泣いてくれるのだろうか。私の跡が、彼から消えないことを願う。

　　　　　　　　＊

　僕たちは北に歩き続ける。雫のタイムリミットがもうすぐそこまで迫っている。雨時々曇りの、今年は特にじめじめしたつゆが、終わろうとしている。次に雨が降ったとき、雫は泡となって消える。僕はこの旅を一生忘れないだろう。忘れられないだろう。

　　　　　　　　＊

　先輩の家に私の母親が来た。どうしてここがわかったのだろう。先輩には申し訳ないことをした。直接謝ることができないのが歯がゆい。彼が先輩と再会するとき、それは私を看取った後だ。

　少年は母親を求めて旅をする。

　私は母親から逃げて旅をする。

　私の旅は贅沢だ。

　　　　　　　　＊

　「ついたぴょん」

雫が僕の方を振り返る。

「ここでいいの？」

僕の問いに雫は黙ってうなずく。

　それに合わせるように、雨が降り始める。

　雫の身体が、先輩の絵の片方が、泡となって消え始めた。